

2. 弥生時代集落の動向（予察）

（1）潤井川流域の様相

今回の発掘調査では、数多くの弥生土器が二次的堆積によるものと考えられる流入土の中から出土している。それらは、型式的な組成から弥生時代後期の段階で考えることができるものである。その中には図24の1や3の壺のように菊川式土器の整形技法や文様を借用するものや6や15のように遠江の影響が窺えるものなどが認められる。このように、東遠江の菊川式土器や西遠江の伊場式土器の影響が顕在化するのは、雌鹿塚II式期に活発となる地域間の土器交流が反映されたものであり、外来系の影響が型式組列に表れる段階を考慮すると今回発見された土器群は、雌鹿塚II式期以降のものであると捉えることができる。今回の調査で発見された弥生土器は、その出土状況からも分かるように、一括性を考えることは難しい。しかし、残存の状況は良い1などの口径と口縁部の高さの比率や菊川式の型式的な属性が受容され整形の技法として確立する段階や5の文様の施文部位、6の扇状文の採用などを考えると雌鹿塚II式期を主体とする土器群であると捉えられる。その中で、外来系土器としての15などは頸部の屈折がしっかりとしており、やや古い型式的な要素を残すものであると言える。

雌鹿塚II式期は、弥生時代後期の中でその時代的な特徴を最もよく表す段階であるが、大中里坂下遺跡に近接する滝戸遺跡SB26で出土している一括土器などがその基準資料となっている。

滝戸遺跡SB26の土器群（図26）は、壺、甕、高坏、小型土器からなる構成を示すものである。壺としての広口壺は、単純口縁壺、複合口縁壺が認められ、複合口縁壺を含む点を特徴としている。壺の頸部から肩部における文様は、一段の縄文に対して端末結節文と円形貼付文の組み合わせにより文様帯を構成する複合口縁壺と5段の縄文による羽状構成する縄文帯に円形貼付文を組み合わせるものとが出土している。多段で加飾性の強い後者は古相を示すものであるが、頸部最小径より下位に施す雌鹿塚II式期の原則を守っている。前者は幅の狭い文様帯に対する上下の区画が表れており、雌鹿塚II式期以降に盛行する文様意匠である。

同時に出土している高坏は、菊川式土器の中段階の型式を模倣したものであるが、本来高坏を弥生時代後期の型式組成として持ち得ない東駿河においては、極めて珍しい器種と言える。それが、土器の交流の目立つ雌鹿塚II式期のものとなると、ひとつの段階としてその時代の特徴をよく表していると言えるものもある。

大中里坂下遺跡の弥生時代を雌鹿塚II式期として、この段階に係る遺跡の動向を捉えて見ると潤井川流域における特異な遺跡群の変遷を考えることができる。先ず、弥生時代中期の遺跡の存在がはっきりしない地域における遺跡の登場は、弥生時代後期に入ってからであるが、その初頭段階についてはよく分からぬ。最初に集落としての出現が明らかなのは、大中里坂下遺跡とは潤井川を挟んで対岸に立地する泉遺跡の環濠集落からである。

集落に伴う環濠が調査されており、雌鹿塚II式期の土器類が発見されている。これらの土器は菊川式土器の影響を強く受けた土器群で、弥生時代後期の土器移動の様子をよく伝える資料として重要であるとともに雌鹿塚II式期を規定する基準的なものとして捉えられる。

この土器群は、環濠の覆土中からの出土であり、環濠の廃絶年代を表すものである。この環濠に係る集落は、この年代かそれ以前に営まれていたものと考えることが妥当であるが、ここで重要なのは、この潤井川中流域において雌鹿塚II式期に廃絶する集落が存在することである。そし

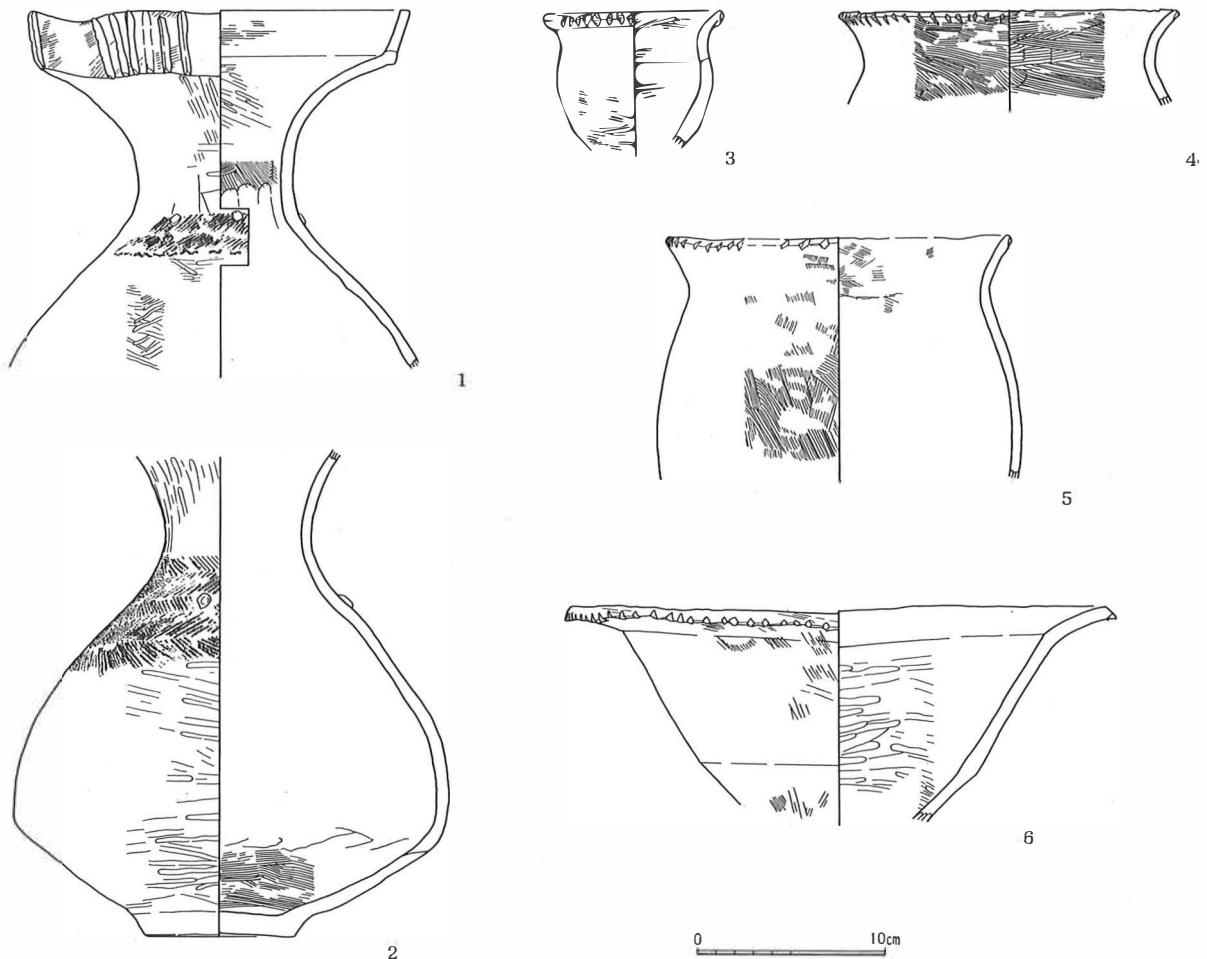


図26 滝戸遺跡SB26出土土器

て、その集落は富士山斜面の丘陵内や星山丘陵あるいは羽駒丘陵などの台地上ではなく、潤井川の形成した沖積地内の微高地上に築かれているのである。

潤井川はその源を富士山の大沢に持ち、空沢が途中から水を湛えることにより河川となるもので、一連の谷筋がその環境により名を変えている。ここでは便宜的に最上流域の空沢部分を大沢、以下を潤井川として呼び分けている。その潤井川が作用して形成された沖積平野は、火山起源の火山灰が厚く堆積している。そのため、本来の土壤では、水利をうまく活用したとしても水田の可耕地を広い範囲に求めるることはなかなか難しい。泉遺跡の南側には潤井川左岸に広がる低湿地を認めることができるが、発掘調査で水田を遺構として確認したことはない。このように、山間に形成された狭い沖積地に進出した弥生時代集落は、その主たる生業を稻作に求める必要はないようであり、稻作を過大に評価するだけの景観は持ち得ないのである。このような地形環境の中で今回の発掘調査で発見された格子状に広がる溝状の遺構が、農業生産の形態のひとつを表すのであれば、それは極めて重要な発見であると評価される。

泉遺跡の集落は、雌鹿塚Ⅱ式期に営まれたムラであったことは環濠からの出土土器からも判断することができる。同時に発見された竪穴住居の一部はこの段階のものであろう。その中で、かつて泉遺跡採集の土器として報告されている壺（図27）などを見ると更に遡って雌鹿塚Ⅰ式期に出現した可能性を秘めていると考えることができる。採集された土器は、折り返し口縁壺と複合

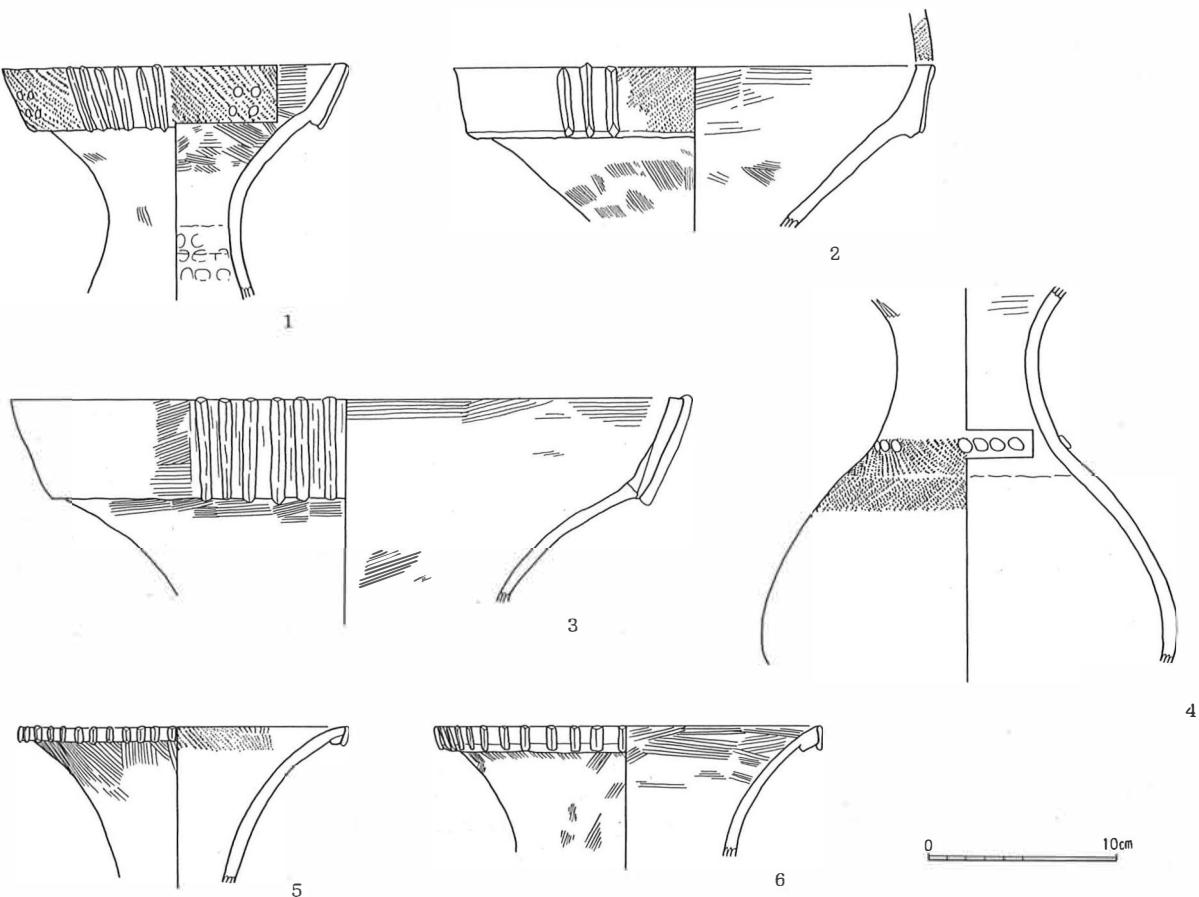
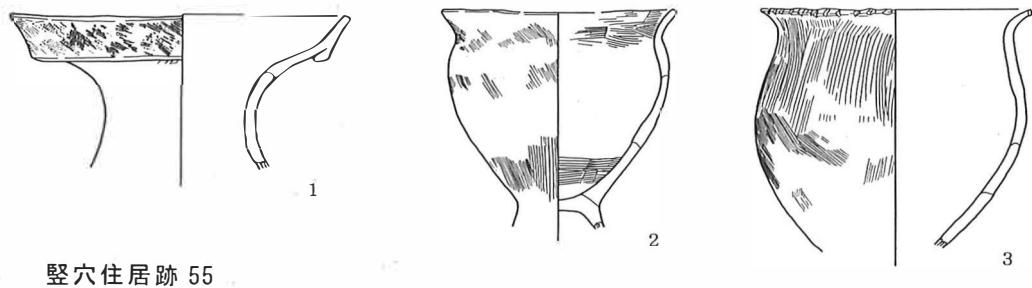


図27 泉遺跡出土土器

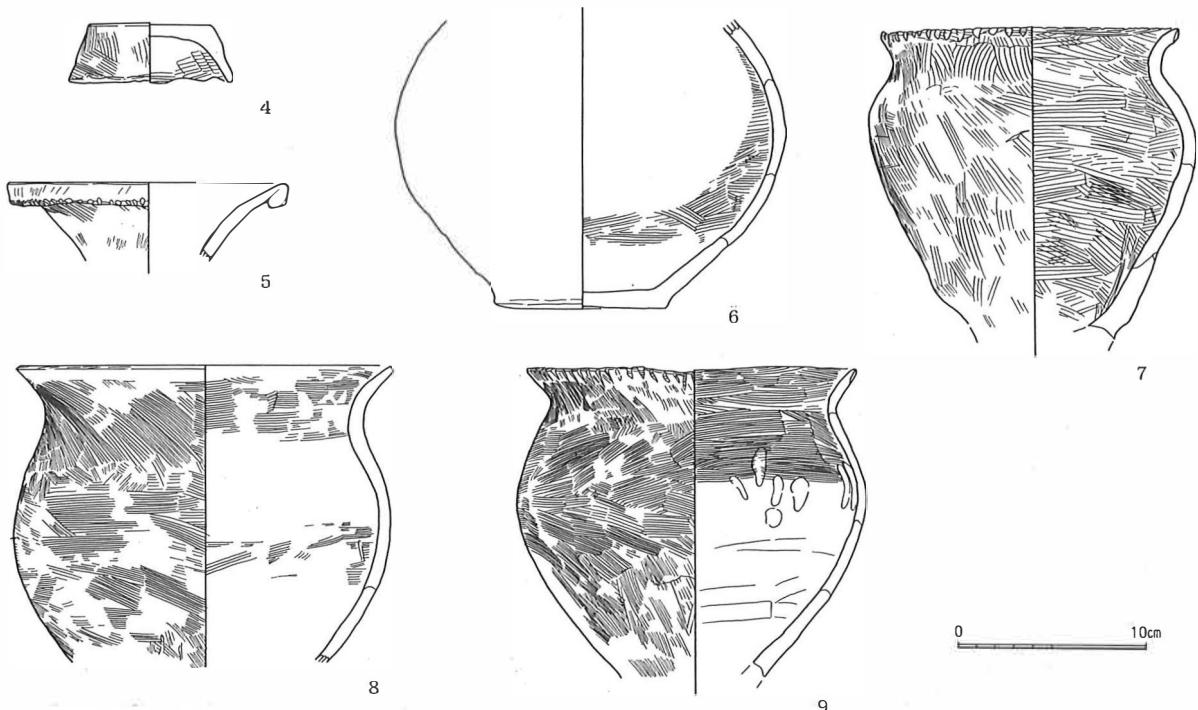
口縁壺が見られる6個体の壺である。それぞれに型式差があり同じ段階のものとしては扱えないが、市内では弥生時代後期の中でも古相を示すものである。特に、図27-1は長頸壺の様子を残す頸部に複合部が付されるもので、複合部の外面に縄文+棒状の貼付文・円形の貼付文などが施されている。比較的加飾性に富み、口径に較べて頸部の径が小さいその器形から雌鹿塚I式期のものと考えることができる。

このように泉遺跡の集落は、この潤井川流域で弥生時代後期において早い段階に出現したものであると考えられる。それは、富士市域の沖積平野を含めた地域においても指摘できることで、今まで富士市における弥生時代後期の遺跡として判明している遺跡は、丘陵先端部にある的場遺跡と丘陵上の向山遺跡、砂丘上の柏原遺跡や三新田遺跡などであるが、雌鹿塚I～II式期に関連する遺跡としては的場遺跡と砂丘上の2遺跡であり、海岸部を含めて広域的に点在する状況が見えてくる。それは、雌鹿塚遺跡や尾崎遺跡あるいは豆生田遺跡、山木遺跡など浮島ヶ原の東側から狩野川にかけて分布するこの段階の遺跡群の状況と良く似たものである。この段階の遺跡が沖積地内に分布するとしても、それは、海岸部だけの低地だけではなく河川の中流域まで進出をしているのである。

泉遺跡の出現は、弥生時代中期の遺跡の見られない地域に対する新たな開発の始まりとして評価されるものであるが、それは沖積地を敢えて選択しての進出なのであろうか。泉遺跡が雌鹿塚II式期段階に廃絶するために弥生時代後期の前半段階の遺跡として取り上げられるものであるが、それが後期後半まで継続する遺跡の場合はその前半段階の状況はよく分からぬのが実態であろ



豊穴住居跡 55



豊穴住居跡 53

図28 月の輪上遺跡出土土器

う。

弥生時代後期の遺跡は、雌鹿塚Ⅰ～Ⅱ式期にかけて沖積平野に展開し、雌鹿塚Ⅱ式期の画期を通して以後、愛鷹山麓、箱根山麓、富士山麓などの丘陵上に進出すると考えられているが、はたしてそうであろうか。

滝戸遺跡のSB26は、雌鹿塚Ⅱ式期の豊穴住居であるが、この住居は、二つの豊穴住居と重複関係を持つものである。そして、それらの中でSB26が、最も新しい段階のものであることが判明している。この重複関係の中で最古段階に位置づけられるSB28は、滝戸遺跡ではあまり見ることができない小判型の平面形で長軸7.5mの大きさを測る豊穴で、SB26出土の土器群より古い様相を示す資料の出土が認められる。

星山丘陵に立地する月の輪上遺跡は弥生時代後期末葉雌鹿塚Ⅳ式期に廃絶する特異な環濠が認められる集落遺跡であるが、環濠を無視するかのようにその外側に展開する集落が発見されている。この集落は、雌鹿塚Ⅲ式期が主体となるもので、その段階の良好な一括資料が出土している。これは、この特異な展開を見せる集落が環濠の時期より古くなることを表すものであり、独自の

変遷を辿ることが指摘できるのである。この集落は、1棟の掘立柱建物に対して数軒の竪穴住居からなる単位建物群（近藤1959）を認められる集落景観を示す特徴的な事例であることは、すでに検討されている（富士宮市教育委員会1994）が、その集落の初源を考えると竪穴住居跡53と竪穴住居跡55の出現がその具体的な遺構として取り上げることができる（図28）。

竪穴住居跡53はここで認められる集落域の北側にある竪穴住居で5.9m×4.8mを測る小判型を示す。出土遺物は、台付甕、折り返し口縁壺、台、土製勾玉、砥石などである。台付甕は型式の異なる3個体の出土が認められるが、いずれも外来の型式的な要素を持つもので構成されている。器形の多様性も目立つがその構成が注目される一括資料である。この土器類は雌鹿塚Ⅱ式期に比定され、月の輪上遺跡では古い段階のものとして捉えることができる（註1）。この竪穴住居跡53は、竪穴住居3軒が重複する状況で発見された竪穴であり、この住居跡より古い段階のものの存在が確認されている。雌鹿塚Ⅱ式期より古い段階の遺構、遺物のある可能性が指摘できる。

竪穴住居跡55は、集落として調査されて区域のもっとも東側で発見された竪穴住居で小判から隅丸方形への過渡的な形態を示すものである。出土土器には、台付甕、複合口縁壺が見られる。これらも竪穴住居跡53の出土土器と同様に雌鹿塚Ⅱ式期のものと捉えることができる。

月の輪上遺跡の集落は、月の輪平遺跡や南部谷戸遺跡などからなる月の輪遺跡群の中で弥生時代後期をその主体としており、同じ弥生時代後期の下谷戸遺跡とともに他の遺跡とは異なる変遷を辿るが、その初源は確実に雌鹿塚Ⅱ式期の段階までは遡るものであると言える。

このような雌鹿塚Ⅱ式期に係る資料としては、石敷遺跡においても同じような動向を追うことができる。月の輪上遺跡とは潤井川を挟んで対峙する石敷遺跡では、富士山斜面地において現状では希薄な分布しか示さないとされる弥生時代の遺跡の中で、その終末期の集落が発見されている丸ヶ谷戸遺跡とともに数少ない弥生時代集落が調査されている。この遺跡では、弥生時代後期の竪穴住居址が7軒発見されている。多くの住居跡が後世の削平を受けており、その残存状況はあまりよくないが、竪穴の平面形の変化を検討するには十分な資料を提供しているものである。

竪穴2は隅丸方形を指向する竪穴住居跡で、その周囲に多くの焼土とともに一括の出土が知られる土器群が発見されている（図29）。1は複合口縁壺であり、複合部に対する文様施文の著しいものである。複合部は比較的幅が狭く、器壁を厚く作る弥生時代後期の古い段階の要素を残すものである。この口縁の形態に対して頸部には、頸部の径が最も狭くなるあたりから肩部にかけて横線文+縄文・貼付文+端末結節文からなる文様が施されている。この構成を示す文様は、雌鹿塚Ⅱ式期以降に菊川式土器などの文様を借用することで成立するものであり、複合部の形態との組み合わせにはやや違和感を覚える型式であるとも言える。2も1同様複合口縁壺の口縁部破片であるが、文様の簡素化が進行しており、複合部の器壁も薄くなる。6は台付甕の下半部破片である。脚台部内面の丁寧なヨコハケメと直線気味に広がる脚台の器形が特徴的である。7は甕の口縁部破片であるが口縁部外面のヨコハケメを認めることができる。以上の諸条件を加味するとこれらの土器群は雌鹿塚Ⅱ式期のものであると考えることができる。その中で複合口縁壺が2個体ある点は、この壺が古墳時代前期にかけて徐々にその比率を減じる形式であることを考えると、複数の個体数を占めており、時代の特徴をよく表していると言える。

石敷遺跡では、竪穴住居跡の平面形が円形指向の小判型から方形を示す隅丸方形へと変化する段階の集落を調査している。竪穴2は方形指向の竪穴であり雌鹿塚Ⅱ式期の年代が想定されるものに対して竪穴3や竪穴8などは明らかに小判型を示している。ここに雌鹿塚Ⅱ式期に起こる現象として竪穴の平面形の変化を指摘できるわけであるが、それは、月の輪上遺跡の竪穴住居跡52～

54の重複関係、竪穴住居跡55の形態、滝戸遺跡のSB26とSB28の形態の違いなどにおいても確認されるものである。これらの中で円形を指向する竪穴住居址はその遺物の出土例が少なく確実な年代を検討するまでは至らないが、確実に雌鹿塚Ⅱ式期があるいはそれ以前の段階を想定することができる。滝戸遺跡のSB28などに認められる雌鹿塚Ⅰ式期の土器をどのように認定するのかが型式組成の正しさを表すものとして重要であるわけであるが、その一括資料にはまだ恵まれているとは言えない。しかし、丘陵部の各遺跡において雌鹿塚Ⅱ式期あるいはそれ以前の遺構・遺物が認められる事象は、それらの集落が出現する段階がそれほど沖積地に立地する泉遺跡の登場時期と変わらないことが表すものとして重要である。

富士山の西南麓にあたる潤井川中流域においては、滝戸遺跡や月の輪上遺跡の星山丘陵上の遺跡と富士山斜面側の石敷遺跡などの出現時期は、環濠集落として営まれた沖積地内の泉遺跡とそれほど大きな時間的な違いはないと考えている。その状況の中で、泉遺跡の環濠廃絶時に対応する時期の土器群を今回の大中里坂下遺跡では確認しているのである。

大中里坂下遺跡と同じ丘陵上に展開している滝戸遺跡における集落の変遷を考えてみると、雌鹿塚Ⅰ式期に丘陵上に集落が出現した後、雌鹿塚Ⅱ式期にその繁栄期を迎える、以後衰退していく

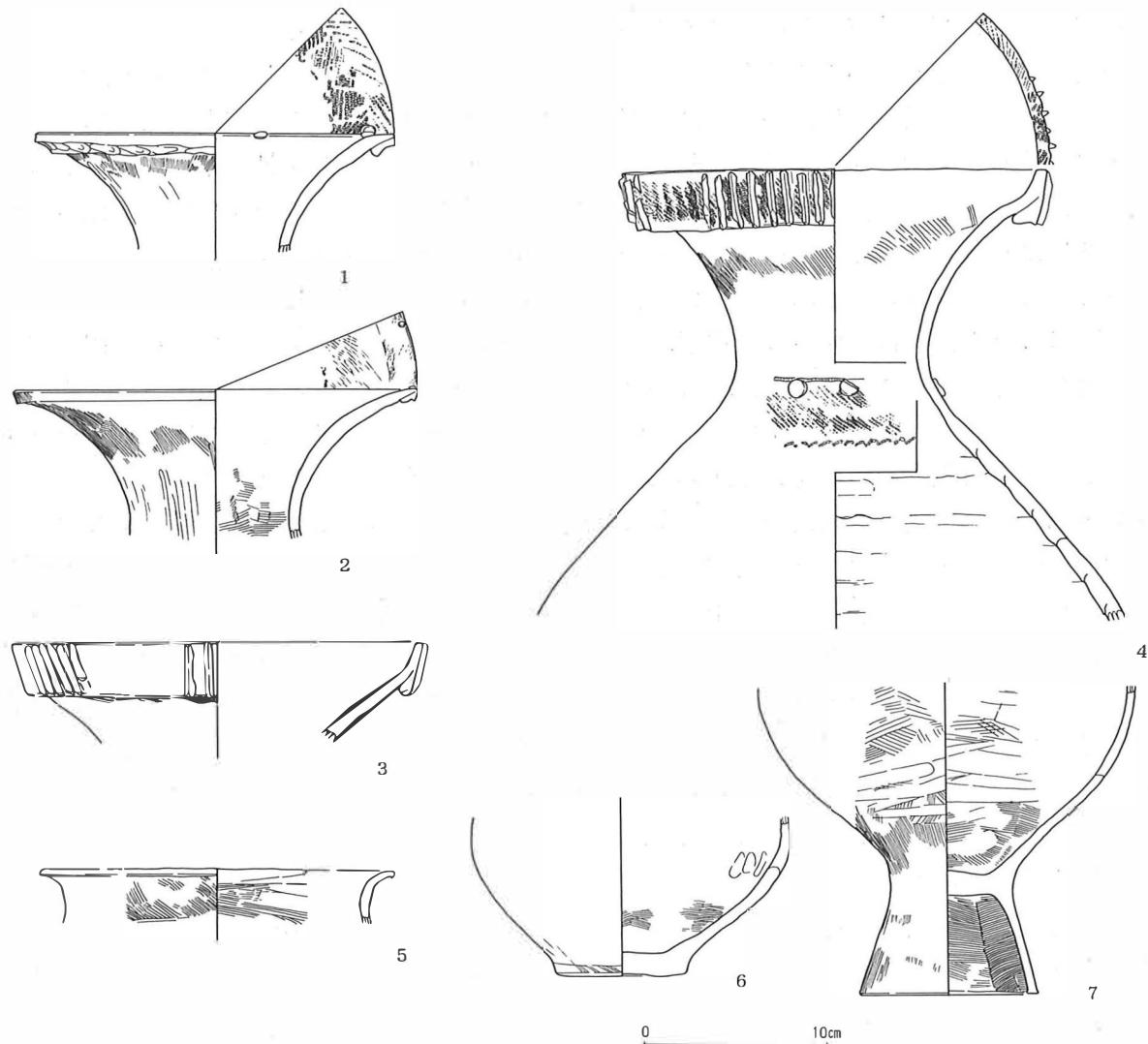


図29 石敷遺跡出土土器

ようで雌鹿塚Ⅲ・Ⅳ式期の土器の出土数は減る。それは川を挟んで対峙する泉遺跡の動向に同調した動きと理解することができる。ただし、滝戸遺跡の場合は潤井川沿いの段丘面には雌鹿塚Ⅱ～Ⅳ式期の時期に当たる方形周溝墓群が築かれており、対応する集落の存在が想定されるのである。

弥生時代後期の集落が営まれた滝戸遺跡においては、古墳時代に入ると丘陵上から川沿いの段丘面まで堅穴住居や方形周溝墓をそれぞれの区域を形成しながらも営まれるようになる。それは大廓Ⅰ・Ⅱ式期のことであり、この時期に対応すると思われる遺構の発見が多い。このような古墳時代前期前半の活発な集落の動向は、泉遺跡においても指摘できることである。大廓Ⅰ・Ⅱ式期における広範囲に亘る遺跡の分布は市域南部の月の輪平遺跡、南部谷戸遺跡や丸ヶ谷戸遺跡などの有力な遺跡を生み出すのである。丸ヶ谷戸遺跡における前方後方形周溝墓はその象徴である。

滝戸遺跡と泉遺跡の共通した動向は、遺跡立地の環境は大きく違えても同調した造営活動を行っていることをよく表しているものと考えることができる。

(2) 愛鷹山の様相

弥生時代後期の集落を考える場合、愛鷹山中腹の限られた範囲に展開する遺跡群の動向は、静岡県東部、駿河湾沿岸地域の遺跡群の基本的な変遷を表わしているものであり、集落の特異な山間における進出とともに平野部の集落との相関性に対する標準的な姿を示している。

広大な範囲を調査して300軒に及ぶ堅穴住居や50棟以上の掘立柱建物跡が発見されている植出遺跡では、それぞれの出土遺物が雌鹿塚Ⅲ式期以降大廓Ⅱ式期までを主体として出土しており、各堅穴の多くはこの年代のものであることが指摘される。特に、大廓Ⅰ・Ⅱ式期の出土資料は良好な状況で発見されており、東駿河地域の古墳時代前期前半の状況をよく表しているものであるが、それは、土器交流の活発な狩野川流域の山木遺跡に代表される状況と大きく違えており、弥生時代以来の在来系土器の占める割合の極めて多い土器組成の中で独自の型式変化を示している地帯であると言える。これは、この植出遺跡ばかりではなく、愛鷹山に展開するこの段階の遺跡全てに対して相当する事象として捉えられる。

愛鷹山に広がる弥生時代後期から続く集落遺跡は、大廓Ⅲ式期に入ると悉く消失しているようで、大半の遺跡の動向は途絶える。それでは、これらの遺跡群の初源はどこに求めができるのであろうか。これまででは、弥生時代後期前半（雌鹿塚Ⅰ・Ⅱ式期）に沖積平野での集落経営が精力的に行われていたものが、後半段階（雌鹿塚Ⅲ・Ⅳ式期）にはいずれも消失して、その動向がはっきりしなくなる。それに呼応するかのように愛鷹山の遺跡群が登場してその経営を始めるとするのが大勢の見解であった（小泉2002）。その沖積地から山中とも呼べる山間への進出は、菊川式土器や伊場式土器の搬入が活発になることや沖積平野にある沼津市尾崎遺跡などの環濠が廃絶されることなどが実際の歴史的な事象として確認されて、衝撃的な画期と認識されている。この画期を通して土器型式が大きく変化するのも確かであり、後期の中で新たな展開を示すようになる。

植出遺跡で発見されている各堅穴住居を検討してみると、明らかに雌鹿塚Ⅱ式期の時期と考えることができる堅穴住居としてSB204、SB207、SB211、SB220、SB258、SB401、SB437、SB455、SB539、SB563などを挙げることができる。これらは調査した地区の中央部南側と北西側にやや偏る状況で確認されるもので、重複関係を持つSB211とSB220以外は一定の間隔を有して点在している。

これらの中には、SB207やSB211あるいはSB220、またはSB539のように他の竪穴住居と重複関係にあるものがあり、それぞれの住居より古くなるものが存在している。その時間的な段階設定は、遺物の出土例が少ないとことなどによりなかなか難しいが、単独で調査地区の中央部に位置しているSB437と呼ばれている竪穴住居などを見ると、雌鹿塚Ⅱ式期段階でもその古い段階のものと捉えられるものがある。

SB437は、3.62m×3.86mの規模を有するやや小ぶりの竪穴住居で円形の平面形を示す。炉は竪穴の中央部に築かれ、4本の柱に対応する柱穴がその周囲に配されており、植出遺跡においてはやや特異な形態の竪穴住居であると言えるものである。

出土遺物は、壺、甕、鉢類である。壺は折り返し口縁壺と単純口縁壺が見られる。この内、折り返し口縁壺はその折り返し部断面が幅広の縦長のものであるため、通常の折り返し口縁壺の折り返し部文様施文部分がその上端部となり面取り部分として捉えることができる特異な形態を示すものである。また、同時に出土している壺の中には、長頸気味の頸部破片があり、多段の縄文と端末結節文による文様が頸部外面に対して幅広く施されているものが見られる。

弥生時代後期の前半段階の集落の登場は、植出遺跡の南側に広がる北神馬土手遺跡においても確認することができる。この発掘調査は沼津市の市道建設に関連する調査として実施されたもので、愛鷹山の遺跡群を南北に貫くような調査範囲の中で、前述の植出遺跡も含む複数の遺跡の調査が実施されている（沼津市教育委員会2003）。その中のひとつである北神馬土手遺跡においては、雌鹿塚Ⅱ式期の土器が発見されているSD2（2号溝）が調査されている。SD2は、南北方向に延びる丘陵を横断するように築かれたものであるが、このような丘陵上を横切る溝は、この愛鷹の各遺跡では数多く発見されている。

北神馬土手遺跡にはさらにSB2（2号住居址）とされる竪穴住居址の一部が調査されている。ここで取り上げられた土器群は、壺、甕、鉢類であり、器高15cm程度の小形の壺を2点含まれる点を大きな特徴としている。これらの壺のひとつは複合口縁壺で、複合部の外面に棒状の貼付文が施されている。SB2出土の土器類はSD2とした溝から出土した土器類より古い様相を示し、雌鹿塚Ⅱ式期以前の時代が考えられるものである。

この遺跡の北側で隣接する植出遺跡に最も近い部分で発掘調査された地区に対する報文においては、雌鹿塚Ⅰ式期に併行する段階を認定しており、北神馬遺跡の出現がその段階であるとされている（沼津市教育委員会2001）。

このように、愛鷹山における遺跡群が登場する時期について発掘調査された資料のほんの一部を紹介して検討してみたが、雌鹿塚Ⅱ式期には集落経営が確実に行われていたことは指摘できる。そして、それ以前の遺構・遺物となり得るもの的存在も窺うことができるものである。

（3）弥生時代後期集落の登場

潤井川流域と愛鷹山山麓における弥生時代後期集落の出現期の状況を確認してきたが、その登場は、沖積地と丘陵あるいは山間地とする地形に規制されるものではなく、ほぼ同時期に各地において現れることが言えそうな状況にある。つまり、沼津市の沖積平野に展開する尾崎遺跡や雌鹿塚遺跡と愛鷹山の中腹と言えそうな丘陵に広がる北神馬遺跡や植出遺跡との集落の造営はそれほどの間を置かずに実施されたのではないかと考えられるのである。

これらの遺跡間における地形環境による集落や土器型式の違いは、その継続期間の違いが大き

く作用して、現在確認できる遺跡の諸属性の中で指摘されていることであり、本来の集落が登場した頃の様子を直接捉えるには、各遺跡において異なる対応が必要となる。その中で共通する情報を検討することでその状況を解明する必要がある。現状では、前述するように雌鹿塚Ⅰ式期の中で各地における集落経営が開始されたと考えている。そして、多彩な地域環境の中でそれぞれに適した生産活動を行っており、平野部における稻作、山間地における畑作などとして生業の形態を違えるものとなるのである。弥生時代後期の生産活動の多様性をここに指摘することができるのである。雌鹿塚Ⅱ式期の竪穴住居である考えられる植出遺跡SB437における炉内からの炭化米の出土は、間接的ではあるがその実態を表しているものとして重要である（静岡県埋蔵文化財調査研究所1997）。

大中里坂下遺跡の畑作関連遺構は、そのような時代の中で山間地における集落経営の一旦を担う生産域の発見として捉えることもできるのである。

弥生時代中期の遺跡との分布域が共通する沼津から三島にかけての弥生時代前半期の遺跡の出現と同時に山間に進出する遺跡分布圏の大きな拡大は、富士山麓のような弥生時代中期の遺跡の存在しない地域までその地形環境を問わないで遺跡が出現する状況まで生み出すようで、遺跡数の大幅な増大が促されるようになるのである。

このような弥生時代後期集落の動向は、山木遺跡周辺で弥生時代後期の初頭段階にその萌芽が認められる。山木遺跡に弥生時代後期集落の出現と同時に程近い丘陵部に神崎遺跡の集落が登場しているのである（註2）。それは、当初から立地環境を違えながら経営の始まる弥生時代後期集落の姿を見る事ができるのである。

このように、弥生時代後期の広域的な地域開発は、その事象面として山間地への進出として捉えることができるが、その具体的な要因についてはよく分からぬ。弥生時代後期という時代的特性の解釈とともに大きな検討すべき課題である。

この課題に対しては、土器の型式編年の確立が欠かせない作業のひとつであろう。時間軸の共通の認識の上で検討しなければ、そもそも議論にもなり得ないのである。

（註）

1. 月の輪上遺跡の竪穴住居跡53出土の土器群に対しては、かつて雌鹿塚Ⅳ式期のものとして捉えていた（富士宮市教育委員会1997）。今回は雌鹿塚Ⅱ式期のものとして大幅に訂正する。従来の土器型式分類の方法論的な誤りに起因しているものであるが、駿河～伊豆地域の弥生時代土器編年はまだ流動的な要素が多い。段階の設定としては現状の時期区分を使用するものであるが、それぞれの型式分類とその組列については改めて検討しなければならない時期に来ていると考えている。
2. 弥生時代後期を雌鹿塚Ⅰ～Ⅳまでの4段階として考えていたが雌鹿塚Ⅰ式期の前に弥生時代中期とを結ぶ初頭段階を設定する必要が山木遺跡や神崎遺跡など出土資料から考えなくてはならなくなっている（静岡県教育委員会1972・韮山町教育委員会1977）。遺跡の分布圏はまだよく分からぬが、狩野川中流域において一定の分布を認める事ができる。この段階を評価すれば、今後、弥生時代後期初頭と雌鹿塚Ⅰ式期～雌鹿塚Ⅳ式期に対して弥生時代後期の拠点的な集落であり継続的経営が窺われる山木遺跡を東駿河～伊豆の標識的な遺跡と捉え、山木Ⅰ式期～山木Ⅴ式期の5段階に分けて時期区分することにする。

〈文献〉

- 小泉祐紀 2002「愛鷹山南麓周辺における弥生集落の動態」『中部弥生時代研究会第5回発表要旨集』中部弥生時代研究会
- 近藤義郎 1959「共同体と単位集団」『考古学研究』6-1 考古学研究会
- 静岡県教育委員会 1972『田方郡韋山町神崎遺跡緊急調査概報』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997『北神馬土手遺跡 他 I・II』
- 韋山町教育委員会 1977『山木遺跡第4次調査報告書』
- 沼津市教育委員会 2001『北神馬土手遺跡・尾上II橋遺跡発掘調査報告書』
- 沼津市教育委員会 2003『市道0230号線関連遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 富士宮市教育委員会 1997『滝戸遺跡』

3. おわりに

本調査は、東京電力株式会社中里線建替え工事に伴う発掘調査であったため、調査面積は比較的狭く、約136m²の調査であった。調査区は、北側の清水川へ向けて傾斜する斜面堆積地にあたり、遺構は、弥生時代後期～古墳時代前期の溝状遺構のみであった。しかし、遺物は豊富に出土し、本遺跡の主体であろうと考えられる南方の高所平坦面には、縄文時代中期～晩期初頭、弥生時代後期～古墳時代前期の集落が広がっていることは、想像に難くない。二次堆積地の調査ではあったが、これまで未調査であった大中里坂下遺跡の様相を垣間見ることができた。